

## 平成11年度 関西大学博物館実習

近年、文化財への関心の高まりと資格取得ブームの影響を受けて、博物館実習の受講を希望する学生数が受講定員を大幅に上回る状況が続いた。そのため今年度は、より多くの受講希望者を受け入れられるよう博物館実習の定員増や施設の改善等の措置を行った。結果、受講希望者のうち博物館実習受講要件を満たす者は全員受講させることができた。

しかしながら、実習内容をより専門化するために行っている歴史・美術・文書の3コース制については、各コースの人数に極端な偏りが生じて、問題を生じていたので今年度は非区分とした。

希望のコースを選択できない受講生を多数生じさせることは、学究意欲を失わせる恐れがあると同時に不本意な受講生を受け入れるコースの学生にも影響を与えかねないため、慎重な対応が必要である。

平成11年度博物館実習受講生数は次のとおりである。

第 1 部	第 2 部	合 計
78	49	127

本年度博物館実習のカリキュラムは、概ね昨年度と同様であるが、後掲「平成11年度関西大学博物館実習日程」のとおり、非常に充実した内容である。「資料の基礎的な取扱」から「資料の梱包」、「資料の調書の取り方」へと段階的に実践してゆく学内実習に並行して、月に一度、日曜日を利用して近畿圏の博物館・美術館施設等で見学実習を実施した。夏季休業中には2日間の近県見学実習と東京を中心とした宿泊実習を実施し、学芸業務全般についての基本的知識習得の総括とした。後期からは、展覧会開催へ向けての具体的な作業について実習し、11月中旬には本博物館第2展示室において「博物館実習展」を開催した。「博物館実習展」は、習得した学芸業務



実習風景

の知識と経験を基に受講生が企画し、展示する博物館実習の集大成としての行事である。平成11年度博物館実習担当者は次表のとおり文化財に関する専門家や学芸員として最先端で活躍中の先生方である。

高橋隆博	文学部教授	伊藤健司	元興寺文化財研究所
泉澄一	文学部教授	西川卓志	西宮市立郷土資料館
上井久義	文学部教授	森隆男	尼崎市歴史博物館設立準備室
鉄川精	工学部教授	井溪明	堺市博物館
米田文孝	文学部助教授	角田芳昭	関西大学博物館
網干善教	関西大学名誉教授	井山温子	関西大学非常勤講師
勝部明生	龍谷大学教授	文珠省三	大阪市文化財協会
宮崎隆旨	奈良県立美術館副館長	山口卓也	関西大学博物館



実習風景

# 平成11年度関西大学「博物館実習」日程

授業時間 第1部 全曜日 4・5限 (14:40~17:50)  
 第2部 土曜日 特別・5限 (14:40~17:50)  
 HLL 3.28

月	第 1 部		第 2 部	
	I	II	I	II
9/金	担当者全員 第1学舎1号館A104教室	クラス編成、実習簿・日程表配布等	担当者全員 第2学舎C303教室	クラス編成、実習簿・日程表配布等
16/金	高橋(隆)	文化財保護法の解説	高橋(隆) 第2学舎C303教室	文化財保護法の解説
23/金	勝部 第1学舎1号館A104教室	考古資料の取扱いの基礎と方法	文珠 第2学舎C303教室	考古資料の取扱いの基礎と方法
30/金	宮崎 第1学舎1号館A104教室	美術工芸資料の取扱いの基礎と方法	井溪 第2学舎C303教室	美術工芸資料の取扱いの基礎と方法
7/金	泉 第1学舎1号館A104教室	文書資料の取扱いの基礎と方法	泉 第2学舎C303教室	文書資料の取扱いの基礎と方法
14/金	上井 第1学舎1号館A104教室	民俗学資料の取扱いの基礎と方法	上井 第2学舎C303教室	民俗学資料の取扱いの基礎と方法
21/金	森 博物館実習室	歴史資料の取扱い	井山 博物館第2展示室	井山 博物館実習室
◎ 日	泉・米田・熊・栗生 堺市博物館・大阪府立法務博物館	博物館等施設見学	井山 博物館第2展示室	井山 博物館実習室
28/金	勝部 博物館第2展示室	考古資料の取扱い	井溪 博物館実習室	文珠 博物館第2展示室
4/金				【昇格記念日】
11/金	宮崎 博物館実習室	美術資料の取扱い	文珠 博物館第2展示室	井山 博物館実習室
18/金	森 博物館実習室	歴史資料の調査の取り方	井山 博物館実習室	文珠 博物館第2展示室

月	第 1 部		第 2 部		
	日	I	日	I	
6	25/金	西川 博物館第2展示室 考古資料の調査の取り方 博物館第2展示室	宮崎 博物館第2展示室 美術工芸資料の調査の取り方 博物館第2展示室	文珠 博物館第2展示室 考古資料の調査の取り方 博物館第2展示室	井山 博物館第2展示室 歴史資料の調査の取り方 博物館第2展示室
	2/金	宮崎 博物館第2展示室 美術工芸資料の調査の取り方 博物館第2展示室	森 博物館第2展示室 歴史資料の調査の取り方 博物館第2展示室	井濱 博物館第2展示室 美術工芸資料の調査の取り方 博物館第2展示室	
7	9/金	高橋(総) 第1学舎1号館A104教室 夏季休暇中の博物館実習日程表配布・実習展打合せ等		米田 第2学舎C303教室 夏季休暇中の博物館実習日程表配布・実習展打合せ等	
	29/木	上井・米田・角田・山口 見学期所は1部7/9・2部7/10に発表			博物館等施設見学(近郊) 連続2日、7月第5週
	30/金	夏季休暇中			
	9/木	上井・高橋・米田・文珠・熊・山口 見学期所は1部7/9・2部7/10に発表			博物館等施設見学(東京方面) 2泊3日、9月第2週、木曜日入れる
9	11/土				
	24/金	網干 第1学舎1号館A104教室		網干 第2学舎C303教室	展覧会の企画
	1/金	網干 第1学舎1号館A104教室		網干 第2学舎C303教室	ポスター作成及び図録編集・出版
	8/金	西川 博物館第1・2展示室		山口 博物館第1・2展示室	展示資料整理・清掃
	15/金	西川 博物館第2展示室		文珠 博物館第2展示室	実習展実施計画及び諸作業
10	22/金	西川 博物館第2展示室		文珠 博物館第2展示室	学生の自主作業・展示指導
	29/日	藤部・宮崎・井藤・山口 (未定)			資料取扱い・観賞(茶室) (時間 10:00~16:00)
	29/金	博物館第2展示室		博物館第2展示室	学生の自主作業(学際?)
		博物館第2展示室		博物館第2展示室	学生の自主作業(学際?)

月	第 1 部		第 2 部	
	I	II	I	II
日	日		日	
11	実習展(8~12日)・講評(12日)・撤去(13日)			
8/13/土	担当者全員(編研) 博物館第2展示室			
26/金	鉄川 第1学舎1号館A104教室	自然科学資料の整理・保存	鉄川 第2学舎C303教室	自然科学資料の整理・保存
28/日	鉄川・角田・山口・聖生 大阪市立自然史博物館 自然科学資料取扱い・展示方法等施設見学 (時間 10:00~16:00)			
3/金	伊藤 第1学舎1号館A104教室	金属・木器資料の保存処理	伊藤 第2学舎C303教室	金属・木器資料の保存処理
10/金	井 咲 第1学舎1号館A104教室	博物館と情報処理	山口 第2学舎C303教室	博物館と情報処理
7/金	担当者全員 第1学舎1号館A104教室 1年間の反省・学芸員の課題			
17/月 締切	担当者全員 【提出場所】 博物館実習簿 博物館実習1ヶ年の総括 A4版 横書き 400字詰用紙10枚(ワープロも可)	博物館実習簿 【レポート論題】 レポートの提出	担当者全員 第2学舎C303教室	1年間の反省・学芸員の課題 提出時間 10時~16時 (但し12:30~13:30は除く)
3/2/木	担当者全員 【受取場所】 博物館実習簿	博物館実習簿	担当者全員 第2学舎C303教室	受取時間 10時~16時 (但し12:30~13:30は除く)

### 【実習上の諸注意】

- (1) 実習に関する全ての連絡は、インフォメーションシステム(お知らせ【その他】)にて行うので、十分注意して見落とさないようにすること。
- (2) なお、緊急の場合はクラス代表者を通じて行う。また日曜日の実習・見学等の詳細については、その都度授業中に指示することもあるので注意のこと。
- (3) 見学は時間的に制約される場合が多いので、時間厳守で集合のこと。
- (4) 館内においては鍵厳守り、学生としての品位と自覚が必要。また、万年筆・ボールペン等を使用しないこと。鉛筆のみ可能。
- (5) 実習見学が終了し、お世話になった見学館には、その日の担当者が後日礼状を出すこと。
- (6) 実習簿は所定の日に必ず提出すること。採点の参考資料とした後、各自へ返却するので、受け取りに来ること。

以上

# 関西大学博物館実習展示会

日時 1999年11月8日(月)～12日(金)

10時～16時

場所 関西大学博物館第2展示室(簡文館内)

## クラウス・キンター現代絵画展

1995年11月より1996年1月までの期間招聘研究員として、関西大学において絵画作品の制作及び講演に従事された、ドイツの現代美術作家クラウス・キンター教授の作品展示を行い、その思想や表現方法に迫る。

## 教科書

教科書は時代ごとの歴史観を映し出す鏡である。明治から激動の昭和初期を経て、戦後間もなくまでの教科書について、日本史上の主な事象や人物に対する評価の変遷を考慮しつつ、比較検討することによって、時代とともに移り変わる歴史観を見る人に問いかけたい。

## 地震 ～忘れられつつあるあの記憶～

最近、トルコ・台湾と世界中で大地震が続発している中、我々は4年前の阪神・淡路大震災の記憶を風化させつつあるのではないだろうか。そこでその教訓をふまえ、いかにして地震に対して備えていくべきか、今一度考えてみたい。

## カップ麺 ～地域限定とキャラクター～

地域限定版のカップラーメンが各種販売されている。その地域限定版の「カップラーメン」の味を明示し比較することによって、地域による嗜好の違いを考える。同様に、同じ麺類である「うどん」についても、嗜好の地域差を考察してみる。また、「限定版」という付加価値を考えるため、商品として限定性のある有名なキャラクターを用いたカップ麺も展示する。

## 宮武外骨 ～滑稽新聞にみる明治人の反骨精神～

近代日本の代表的ジャーナリスト「宮武外骨」の代表的雑誌である「滑稽新聞」に焦点を当て、彼のユーモアや批判精神を浮き彫りにすることで、現代の報道のあり方をもう一度問い直す。

## 人と化粧品 ～つつりゆく美意識～

化粧品の変遷について調べ、その背景にある人々の生活や意識の変化を探る展示を行う。

- ① 化粧道具そのものの変遷を見る。
- ② 化粧品についての歴史的背景を探る。
- ③ 化粧品を用いた人々はどのような人々なのか調べ、時代の変化と意識の変化を検討する。など。

## うさぎ・兎・卯 — 現代に生きるウサギ —

「因幡の白兎」に代表される様に、人々は昔からウサギに親しみを持っている。卯歳にちなみ、「ウサギ」が持つ独特のイメージに注目しつつ、現在に残るウサギの童話やキャラクター商品等を検討し、その特徴を紹介してゆく。

# 1999（平成11）年度 関西大学博物館実習実習展示会 観覧者アンケート 調査報告書

私たち博物館実習履修生は、平成11年11月8日(月)～12日(金)の日程で博物館実習展示会を、関西大学博物館第2展示室（簡文館内）において開催した。その際、観覧者の意見を今後の実習に活かすため、観覧者アンケートを実施した。これは、その観覧者アンケートの結果を集計し、報告するものである。

## 1. 観覧者アンケート実施概要

調査日時：1999（平成11）年11月8日(月)～12日(金) 10：00～16：00

調査場所：関西大学博物館第2展示室（簡文館内）

調査対象：博物館実習展示会の観覧者の有志

調査方法：展示室の入り口にアンケート用紙と筆記具を設置し、有志の観覧者に記入してもらった。尚、アンケート用紙は付録として示した。

## 2. アンケート集計結果

### ●全体的結果

観覧者アンケートに回答していただいた人は、全員で101名であった。その内訳は以下に示す。

(1) 性別

男性	：50名
女性	：47名
不明	：4名

(2) 職業

本学学生	：91名
文学部	：81名
経済学部	：1名
社会学部	：5名
工学部	：4名
院生	：3名
その他	：10名（OL、会社員、無記入を含む）

1回生	：31名
2回生	：20名
3回生	：7名
4回生	：30名

(3) 実習展示会を知った情報源

知人	：22名
掲示板	：1名
授業の一環	：35名
その他	：43名（テレビ、新聞、無記入を含む）

#### (4) 実習展示会全体について

◎良かったと思う点、あるいは展示物があれば記入して下さい。

- ・「人と化粧」展は、歴史の流れや化粧品の変化が分かりやすく、また普段目にすることができないような展示品が多くて良かった。「クラウス・キンター」展では、スライドを見せてもらい、とても良かったと思う。(F・OL)
- ・「ガイコツ」展の図録は小物が多くて良かった。(M・前実習生)
- ・「人と化粧」展では、美意識の変遷がよく分かりました。今後どのように変化していくのか、興味があります。(F・会社員)
- ・「うさぎ」の展示の仕方は特に分かりやすかった。破魔矢の角度が絶妙。(F・本学学生)
- ・展示の内容が濃いものが多く、興味をひかれるものが多かったし、解説者が積極的だった。(F・前実習生)
- ・生活の中にあるちょっとしたことをテーマにしているものもあれば、教科書など歴史と直結したものもあり、バラエティに富んでいた。(M・本学学生)

◎その他、お気づきの点がございましたら記入して下さい。

- ・のりパネルは斜めにカットするときれいにできます。(M・前実習生)
- ・何故この展示を選んだのかを、もっと分かりやすく、一目で分かるようにして欲しかった。(M・会社員)
- ・もっと一般の学生が気づくような、実習展示会のPRがあればいいと思う。(F・前実習生)
- ・展示期間が短かすぎる。より多くの人に見てもらえるように、宣伝と期間について検討すべきでは。(M・無記入)
- ・質問したときに、もっと積極的に説明して欲しかった。(M・本学学生)

注：( )内の「F」は女性、「M」は男性、「前実習生」は昨年度の博物館実習履修生を表す。

以上のように、観覧者の大半は本学の学生である。特に、本年度の博物館実習履修生や以前に履修していた学生が大半を占めていた。学生の多くは、知人から展覧会について聞いたり、あるいは博物館学関連の授業の一環として訪れていた。つまり、博物館実習に何らかの関係がある学生が訪れているのであり、一般の関係がない学生はほとんど来館していない。この結果は、実習展をどのように宣伝していくかという問題を提示していると思う。実際、インフォメーション・システムにおいて、実習展示会を行うということは伝えているものの、それ以外の表立った宣伝活動は全く行っていなかった。せめて、ポスターを各学部の掲示板に1枚ずつくらい貼る必要があるのではないだろうか。そのことで、より多くの学生に実習展示会の存在をアピールすることができ、より範囲の広い観覧者を得ることができよう。

一方、学生以外の観覧者は、テレビでの放映(4名)や新聞記事(2名)を見て訪れていた。来年以降も、テレビなどの取材を受けることで、外部の観覧者、大学周辺地域からの観覧者を獲得していく必要があると思う。

展示会全体について多くのご意見を頂いた。その大部分は、我々の取り組みに対して好意的な



評価であったが、中には厳しい指摘などが含まれており、来年度以降の実習展示会に反映できればと思う。

### ●各班の展示について

各班の展示について、共通の質問と各班独自の質問を設けた。共通の質問の結果は、表1に示してある。ここでは、班独自の質問に対する観覧者の回答を、各班のアンケート系の考察をもとにまとめた。尚、〈 〉内に各班のアンケート係を示した。

#### ○クラス・キントー現代絵画展

他の班とは違う現代美術という展示内容に、観覧者がどのような印象をもったかを聞いてみた。全体的には、「クラフトワークやコラージュなど、芸術的・独創的で新鮮な印象があり興味深かった」「普段、見かけないのでとても新鮮でした」という好意的な意見が多かった。しかし一方で、「作品の主題が漠然としていて寂しい雰囲気だった」「コラージュについての説明が欲しかった」「分かる人には分かるのでしょうかねえ」などの意見があり、現代美術を理解させる難しさを実感した。その他、「パネルの文字が小さすぎる」「説明してくれた人がとても熱心で丁寧に解説してくれた」という声もあった。

〈哲97-1 朝倉万紀子、哲97-4 石角憲子〉

#### ○教科書

班独自の質問は設けていない。表1を見ると、「ふつう」「よい」という意見が同じ程度の数値であった。全体に対する意見の中には「専門的な展示」というような意見もあったし、「もう少しつつこんだところが欲しい」といった意見もあった。先生方のご高評では、展示ケースのさみしさ、図録の不十分さ、また文字資料の展示の難しさなどを指摘された。

〈史・地96-107 田地優作〉

#### ○地震 ～忘れさられつつあるあの記憶～

想像していた以上に阪神大震災で直接に被害を受けた人が多く、生々しい当時の記憶を紙面いっぱいを書いて頂いた。被害についての展示に対しては多くの感想を頂いたが、地震の歴史・防災についての展示に対する感想が少なかった。

〈史・地97-148 山村昌宏〉

#### ○カップ麺 ～地域限定とキャラクター～

質問：あなたはカップ麺をどのくらいの頻度で食べますか？

回答：よく食べる (29名)、たまに食べる (28名)、あまり食べない (36名)、無記入 (8名)

展示の統一を図るために出品数を限定したのだが、「展示物の数が少ない」という指摘が多かった。展示物への親近性(カップ麺を食べる頻度)と展示への評価を重ね合わせて見ると、あまり差はないものの、「あまり食べない」と回答した人は「よく食べる」「たまに食べる」と回答した人よりも、展示に対する評価が厳しかった。つまり、「カップ麺」というテーマは、

誰もが身近に感じると思っていたが、「あまり食べない」人にとって今回の展示は、カップ麺売り場とたいして変わらなかったのかもしれない。展示物への親近性が低い人でも楽しく観覧できる展示にしていくために、更に工夫する必要があると思った。

<国97-64 西尾 素>

#### ○宮武外骨 ～滑稽新聞にみる明治人の反骨精神～

質問1：以前から宮武外骨をご存知でしたか？ →はい(17名)、いいえ(75名)、無記入(9名)

質問2：宮武外骨に対する興味は増しましたか？ →はい(83名)、いいえ(8名)、無記入(10名)

今回、我々が取り上げた宮武外骨はやはり知名度が低かった。特に、1・2回生となると皆無に等しく、既知の人は4回生に多くみられた。しかし、注目すべきことは宮武外骨という未だ知らぬ人物に対して、興味をもったと答えた人が80%を越えたことである。この結果は、「宮武外骨」自身の言動、「滑稽新聞」の面白さが、最大の原因となってもたらされたものだろう。しかし、その面白さを引き出したのは私たちの展示であると思いたい。外骨についての研究、その結果を発表する展示（キャプション、図録、解説など）が、宮武外骨の魅力を引き出し、観覧者へ伝えるという役割を果たせたのではないだろうか。さらに、現代社会における広告に対する関心の高さなどと絡めて研究することの必要性を、観覧者から意見として得られたことは大きな実りであった。

<科目等履修生 宗次 希>

#### ○化粧品の変遷

質問1：どの時代の化粧品が一番興味深かったでしょうか？

江戸(29名)、現代(25名)、明治(13名)、昭和(9名)、その他(7名)、  
無記入(18名)

質問2：自分の顔は好きですか？ →はい(35名)、いいえ(52名)、無記入(12名)

展示に関して、できるだけ文字量を少なくし、写真パネルや展示物を並べることで、視覚的効果を期待したが、「身近なテーマである」という助けもあって多くの方に興味を持ってもらったようである。「化粧品」は「ばける」と「よそおう」といった意味の二つの文字で構成されている。化粧方法や化粧品が多様化した今日であるからこそ、化粧を施す目的は様々であろうが、「自分の顔を好まない」といった回答が多かったことは、「化けて粧う」という根本的な目的は今も昔も変化していないということ、如実に示しているのではないだろうか？

<史・地96-109 巽 陽介>

#### ○うさぎ・兎・卯 ～現代に生きるウサギ～

「うさぎ」に対するイメージが変化したと答えた人は、わずかに4人であった。しかし、多くの人が意見を残してくれた。「ミッフィーはかわいい」「親しみやすいし、面白かった」という好意的な意見、「単にキャラクターを並べているだけなのでは?」「同じもの(キャラクター)が多い・別のものが見たい」という厳しい意見、「古代インドに月のうさぎの考えがあったことに驚いた」「マイメロディーがうさぎだとは知らなかった」という発見などの私たちにとっ

てはうれしい意見に大別される。特に、厳しい批判を真摯に受けとめて、今後につなげていこうと思う。また、先生方から頂いたご高評には「図録が多すぎる（予算を超えている）」といったものがあつたが、私たちの班は事務室から配分される予算を1円たりとも超えていないということをここに記しておきたい。

＜社96-553 岡本吉史＞

### 3. まとめ

まとめとして、先生方のご高評や観覧者からの意見をまとめた者として、今後の実習展示会にぜひ参考にして欲しいと思うことをいくつか指摘したい。

まず、図録に関してである。ご高評の中にもあつたが、奥付けのない図録があつたり、図録中の解説の文責が明確でなかったり、写真などの配置がいまいちであつたりするものが多かつた。情報化が進み、非常に大量の出版物が発行される今日、いつ誰がどのような意図をもって発行したものであるかを明確にすることは重要である。また、著作権の所在を明らかにする上でも、それぞれの文責を明示する癖を実習展からつけておくことは今後のためになると思う。基本的に、図録のレイアウトは作成者のセンスに任せられているのだけれども、実際の展覧会で発行されている図録を多く参照し、どのような構成が見やすく、また興味をひくものであるかを十分に研究することが大切であると思う。

次に、展示方法の問題である。必要以上に多くの展示物が混在していたり、逆に展示スペースが大きく空いていたり、出品物とスペースの配分がうまく調整されていなかった。また、文字情報をどのように魅せるかが大きな課題であつたように思う。単に、あるページを示すだけでは、誰も見てくれないし、見たいと思う人は次のページや他のページを見たいと思うであろう。観覧者それぞれの欲求を、最大公約数的にどのように反映するかが今後の課題であると思う。

この報告書を参考にされ、今後の博物館実習展示会がより充実したものになることを祈念して報告を終わりたい。

アンケート集計担当

社96-553 岡本 吉史

表1 共通の質問に対する回答結果

展示名	「うさぎ・兎・卯～現代に生きるうさぎ～」展		「カッパ題～地域限定とキャラクター～」展		「クラウス・キンター」展		「地震～忘れ去られた記憶」展		「人と化粧～つりゆく美意識～」展		「宮武外骨～滑稽新聞にみる明治人の反骨精神～」展		「教科書」展		
	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	人	%	
展示方法	い	48	47.5	57	56.4	36	35.6	63	62.4	55	54.5	63	62.4	39	38.6
	よ	44	43.6	35	34.7	51	50.5	34	33.7	38	37.6	28	27.7	49	48.5
	ふ	3	3.0	5	5.0	4	4.0	1	1.0	3	3.0	1	1.0	8	7.9
	よ	6	5.9	4	4.0	10	9.9	3	3.0	5	5.0	9	8.9	5	5.0
説明	い	35	34.7	34	33.7	31	30.7	54	53.5	40	39.6	56	55.4	34	33.7
	よ	51	50.5	55	54.5	48	47.5	40	39.6	50	49.5	31	30.7	48	47.5
	ふ	6	5.9	6	5.9	10	9.9	3	3.0	5	5.0	2	2.0	12	11.9
	よ	9	8.9	6	5.9	12	11.9	4	4.0	6	5.9	12	11.9	7	6.9
図録	い	33	32.7	35	34.7	33	32.7	48	47.5	41	40.6	58	57.4	34	33.7
	よ	52	51.5	53	52.5	51	50.5	42	41.6	48	47.5	31	30.7	50	49.5
	ふ	2	2.0	0	0.0	2	2.0	4	4.0	3	3.0	0	0.0	3	3.0
	よ	14	13.9	13	12.9	15	14.9	7	6.9	9	8.9	12	11.9	14	13.9
ポスター	い	35	34.7	38	37.6	31	30.7	32	31.7	35	34.7	50	49.5	23	22.8
	よ	49	48.5	46	45.5	47	46.5	55	54.5	52	51.5	35	34.7	55	54.5
	ふ	3	3.0	3	3.0	6	5.9	2	2.0	1	1.0	0	0.0	6	5.9
	よ	14	13.9	14	13.9	17	16.8	12	11.9	13	12.9	16	15.8	17	16.8
出品数	い	19	18.8	3	3.0	15	14.9	9	8.9	17	16.8	18	17.8	4	4.0
	よ	75	74.3	54	53.5	71	70.3	72	71.3	74	73.3	73	72.3	68	67.3
	ふ	3	3.0	40	39.6	6	5.9	15	14.9	5	5.0	1	1.0	21	20.8
	よ	4	4.0	4	4.0	9	8.9	5	5.0	5	5.0	9	8.9	10	9.9
出品物	い	40	39.6	48	47.5	44	43.6	49	48.5	45	44.6	63	62.4	48	47.5
	よ	50	49.5	44	43.6	46	45.5	47	46.5	47	46.5	28	27.7	38	37.6
	ふ	6	5.9	5	5.0	1	1.0	3	3.0	4	4.0	1	1.0	6	5.9
	よ	5	5.0	4	4.0	11	10.9	2	2.0	5	5.0	9	8.9	9	8.9
全体的な印象	い	40	39.6	50	49.5	32	31.7	51	50.5	48	47.5	65	64.4	42	41.6
	よ	48	47.5	40	39.6	55	54.5	44	43.6	43	42.6	25	24.8	47	46.5
	ふ	8	7.9	7	6.9	4	4.0	2	2.0	5	5.0	1	1.0	7	6.9
	よ	5	5.0	4	4.0	10	9.9	4	4.0	5	5.0	10	9.9	5	5.0
最も印象に残った出品物	い	28	27.7	39	38.6	31	30.7	44	43.6	34	33.7	51	50.5	34	33.7
	よ	52	51.5	41	40.6	49	48.5	41	40.6	49	48.5	30	29.7	43	42.6
	ふ	3	3.0	6	5.9	3	3.0	0	0.0	3	3.0	0	0.0	6	5.9
	よ	18	17.8	15	14.9	18	17.8	16	15.8	15	14.9	20	19.8	18	17.8

1999年度 関西大学博物館実習 観覧者アンケート

この度、私たち関西大学博物館実習生は、実習課程の一環として、実習展示会を催す運びとなりました。今後の学習をより深めるため、アンケート調査を実施させて頂いております。何卒ご協力を賜りますようよろしくお願い致します。

(1) 性別 1. 男性 2. 女性

(2) 職業 1. 本学学生 ( ) 学部 ( ) 年生  
2. 他大学生 3. 高校生 4. 実習生 5. その他 ( )

(3) 今回の実習展をどのようにしてお知りになりましたか。  
1. 知人 2. 掲示板 3. 授業の一環 4. その他 ( )

(4) 実習展全体について

◎良かったと思う点、あるいは展示物があれば記入して下さい。

( )

その他、お気づきの点がございましたら記入して下さい。

( )

(5) 実習展での個別の展示について

今回の実習展示会は7つのグループに分かれて行っています。各班の展示について右記の事項にお答え下さい。表中の選択肢のいずれか1つに○印をお付け下さい。また、各班独自の質問にもお答えください。(実習生は自分のグループの欄にも○をつけること)

展示名	「うさぎ・兎・卯～現代に生きるうさぎ」展	「カップ麺—地域限定とキャラクター—」展	「クラウド・キントー」展	「地震—忘れ去られつつあるあの記憶」展	「人と化粧～うつりゆく美意識～」展	「宮武外骨～滑稽新聞にみる明治人の反骨精神～」展	「教科書」展
展示方法	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない
説明	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない
図録	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない
ポスター	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない
出品数	多 い 適 当 少 ない	多 い 適 当 少 ない	多 い 適 当 少 ない	多 い 適 当 少 ない	多 い 適 当 少 ない	多 い 適 当 少 ない	多 い 適 当 少 ない
出品物	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない
全体的な印象	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない
最も印象に残った出品物	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない	よ い ふ つ う よ くない

※ 班独自の質問項目

☆ 「クラウド・キントー」展について

◎他の班と違う現代美術という内容を取り上げましたが、今回の展示のようなクラフトやコラージュについてどう思いますか？

( )

☆ 「地震—忘れ去られつつあるあの記憶」展について

◎阪神・淡路大地震の思い出があればよろしければお聞かせください。

( )

☆ 「うさぎ・兎・卯 ～現代に生きるうさぎ～」展について

◎「うさぎ」に対するイメージは変化しましたか？ また、どのように変化しましたか？

( )

☆「カップ麺 ―地域限定とキャラクター―」展について

◎あなたはカップ麺をどのくらいの頻度で食べますか？

1. よく食べる    2. たまに食べる    3. あまり食べない    4. 食べたことがない

☆「人と化粧 ～うつりゆく美意識～」展について

◎1. どの時代の化粧が一番興味深かったですか？

\_\_\_\_\_ 時代

2. 自分の顔は好きですか？

はい                      いいえ

☆「宮武外骨 ～滑稽新聞にみる明治人の反骨精神～」展について

◎1. 以前から宮武外骨をご存知でしたか？

はい                      いいえ

2. 宮武外骨に対する興味は増しましたか？

はい                      いいえ

# 平成11年度 博物館実習報告

## — 受講生のレポートから —

一年間の実習総括

### 博物館実習一ヵ年の総括

史地96-38 岡田実花子

私は、大学に入るまで個人的に博物館を訪れたことがほとんどなく、訪れたとしても、学校行事などで仕方がなくということがほとんどでした。それは、博物館が古いものを集めて、何やら難しく説明し、展示しているところであり、私には理解できない世界のように感じていたからです。しかし、大学に入り、海外へ行った際、ふとその国の博物館を訪れたとき、歴史の教科書で見たことのある作品や遺物を見る事ができ、単純な動機ではあるのですが、その展示から読み取れるその国の文化や、風習に魅力を感じたことがきっかけで、学芸員関係の科目を履修しました。

このような動機から受講したこともあり、はじめは自分自身が展示し、見てもらう立場であるという自覚が欠けていたのではないかと思います。実際、博物館実習の授業の一貫で博物館を訪れることが多々ありましたが、はじめのころは、ただ「〇時に〇〇博物館に集合、後は自由解散」と言われ、一体何をどう見ていいのか、戸惑うばかりでした。ですから、その頃はただ、観覧者として作品を眺めるということが多かったです。しかし、授業を進めるうち学芸員としての仕事や、展示に至るまでの資料収集から保存などの話を聞き、博物館を訪れて見る際の自分の観点が変わってきたことに気づきました。つまり、展示する側の立場から、どのように作品・遺物が展示されているのか、その展示にはどのような工夫がされているのかなど、また、観覧者の立場としても、ただ作品・遺物を見るのではなく、解説パネルの位置や、その文字量は適当か、導線はどうかということを見る視点を養うことが出来たのです。

実習を通し、はじめて知ったことは、その資料の取り扱い方の厳重さです。まず、手を洗って、指輪や時計、ネクタイをはずすなどたしなみを整えることから始まり、資料は、まず触るのではなく、見ることで、それが箱に入っている場合は、どのような状態でなおされているのかをよく見ながら開けるなど、これまで自分がものをいかに乱暴に扱ってきたかを反省しました。とくに、人からその資料を提供していただくときは、借りる前からの態度（礼儀）が見られ、また、通された部屋にある作品の学識がなくては、借りる以前の問題であり、会っていただけないことがあるなど、とても驚きました。茶室で学んだ礼儀作法も、私には初めてのことで、例え学芸員にならなかったとしても必要な知識や礼儀作法を学ぶことが多く、自分自身を高めるという点において、この実習はとてもいい経験になりました。

博物館見学や、関連施設の見学を通し、まず実感したことは学芸員という仕事の大変さです。それまで、博物館に行っても学芸員の姿をあまり見る事がなく、どのような仕事をしているのか



あまりイメージできなかったのですが、見学の時に、学芸員の職場や、その様子などを見学させていただくことができ、想像していた以上の現実の厳しさに驚きました。学芸員は大変なのだということを、博物館学(一)(二)を担当していただいていた先生方からは聞いていたのですが、とは言っても自分の研究をする時間の方が多いのかと思っていたのです。しかし実際には、博物館の展示の仕事は、研究の片手間に出来ることではないのだと分かりました。また、作品が展示されるまでに、作品や遺物を消毒したり、それらの保存、いかに展示すればよいかの工夫、そして特別展や常設展の広報活動など、これまでただ単に作品を集めて展示しているだけの博物館というイメージが私のなかで一掃されました。

また、これまで私が見てきた博物館のイメージとは違った博物館が多くあることも知りました。つまり、これまで博物館というと、ある程度の知識を持った人を対象としていて、なにやら難しい単語でその作品や遺物を説明しているというイメージを持っていたのですが、実際、いろいろなタイプの博物館を訪れてみると、そういった旧タイプの展示法を行っている博物館は少なく、マルチメディアの機器を多く利用し、どんな世代の人達にも分かりやすく、簡単に理解できるような展示がされていることに驚きました。

しかし、誰にでも理解できる展示は、一方で、そういった基礎的知識を持つ人にとっては不必要であり、これまでの旧タイプの博物館も重要であるという、一方を優先すれば一方が成り立たないというジレンマに陥ることも博物館が抱える課題であると実感しました。しかし、博物館の本来の意味、「資料を収集、保管し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関」という観点からすると、やはり広く子供からお年寄りまでが楽しめて、学べる機関であるべきであると私は考えます。これまでの私がそうであったように、難しい知識の羅列では一般公衆の利用が増えるはずがないのです。誰でも気軽に利用できる博物館こそ、今後の博物館のあるべき姿なのだと思います。

では、どのような展示であれば誰にでも気軽に利用してもらえるのでしょうか。

これまで、博物館見学をした中で、印象に残っているのは、「国立歴史民俗博物館」「江戸東京博物館」「滋賀県立琵琶湖博物館」です。いずれの博物館にも共通している展示手法が、展示物をケースで囲った展示が少なく、五感を使って見る事ができるというものです。パネルをじっくり読まなくとも、展示物を流れに沿って見るだけで理解でき、実際に触ったり、聞いたりできる体験型の展示は、字の読めない小さな子供でも、経験によりそこから学び取ることができるのです。こうした展示を行っている博物館の来客層を見ても、そのことは一目瞭然です。つまり、小さな子供からお年寄りまで、幅広い年齢層、そして多くの来客者がいました。

しかし、その一方で、オープンケースの展示が多いということは、レプリカや模型を多く利用しているということであり、実物の少ない博物館もどうかという問題が出てきます。また、学芸員の方の話では、「こういった体験型の展示を行うと、その展示物が壊されることが多い。何回か修繕を行ったが、きりがないので壊れたまま展示している。」という実態もあるようで、これらは今後の博物館の課題とも言えます。

以上のように博物館等施設見学や、実習の授業を通し、いかに展示物を人に見せるか、展示物の取り扱い方などを学んで、その集大成とも言えるのが実習展であったといえます。

私たちの班は、「人と化粧～うつりゆく美意識～」を展示し、中でも私は、「雑誌に見る化粧」「現代の化粧」を担当したのですが、一番大変だったことは、古い雑誌を探すことでした。はじめは、府や市の図書館をあたったのですが、なかなか昭和初期の雑誌を所蔵している図書館がなく、しかし、化粧の仕方や化粧品がどのように変化してきたかを目でみて理解してもらうためには、どうしても古い雑誌が必要であるということで、大変困りました。昭和50年代後半以降のものでなんとかしようかと諦めかけたとき、たまたま、班員の祖母の実家に数冊昭和初期の雑誌が残っており、なんとか今回の展示にまで至ったのです。

展示ケースが限られているなかで、いかに理解してもらおうか、話し合った結果、解説パネルを読まなくとも（とはいって解説パネルを手抜きしたわけではありません。解説パネルは解説パネルで、より理解を深めてもらえる内容にしました。）、目で見て理解してもらえるように展示しました。また、「現代の化粧」のケースでも、化粧をしない状態と、した状態を対比させるため、写真のパネルを使ったり、人形に化粧をほどこしたりと、やはり、目で理解してもらえるよう工夫しました。はじめは、観覧客に化粧をしようかと言う案もあったのですが、人数の関係等から、結局展示だけになりました。

全体としては、やはり、夏休みが明けてから本格的に皆が集まって行動し始めたので、時間が足りなかったということが一番の問題であったと思います。私たちの班は、東京のポーラ文化研究所の方にお話を聞くということも行ったのですが、もし、もう少し前から班編成がされていれば、東京実習の際に、いろいろ行動できたと思います。また、4年生が中心の班であったため、卒論や就職活動などが重なり、皆が集まることが困難であったという問題もありました。

しかし、全体として、実習展は学芸員の仕事がどういうものなのかを理解し、また、いかに展示するか、相手の立場にたって物事を考える力を養うという点においては、とてもいい経験になりました。

東京実習は、今年度から、各グループごとに自由に博物館を選定し訪れるという方式を取り入れたようですが、私は、この方式の方がいいと思います。おそらく、団体に訪れたとしても博物館側に迷惑になることもありますし、また、美術・歴史・自然の博物館でも見たい博物館にはそれぞれ個人差があると思うので、最初と終わりだけ統一して、他は自由とする方式を今後も続けたほうがいいと思います。実習の時期もちょうど良いと思います。ただ、先にも述べたように、実習展があることははじめから分かっていることなので、その班編成を早く行ったほうがいいと思いました。早い時期から実習展を意識することで、博物館見学の際の見る視点も変わってくるのではないのでしょうか。

博物館学実習を一年間受講し、私自身色々な面において大きく成長することが出来ました。人から物を借りる際の礼儀やものの扱い方、相手の立場に立って物事を考える精神など、初心を忘れることなく大切にしていきたいと思います。

これまで、博物館を訪れることをためらっていましたが、今後は積極的に足を運び、学芸員の勉強をした立場として、また、観覧客の立場として、展示に対する指摘や提案が出来ればと思います。

## 博物館実習の1年を振り返って

史・地96-146 早川 哲

「博物館実習」。この授業が1年に占めた割合は相当大きなものであった。この実習を受講することを決め、4月のガイダンスに集まった際には、休日の博物館見学・2コマ連続の授業・夏の東京見学実習など、先輩方から聞いていた様々な噂が頭をよぎっていた。とりあえず大変そうだが、一体どんなことをする実習なのか。そういう漠然とした印象しかなかったように思う。しかし、ただ「大変だ」という悪印象だけが頭にあったわけではなく、これまで受けてきた講義とは違う内容というものに対する期待もまた多くあったことは確かであった。以下、講義・見学と実習展などに分けて1年間の実習を振り返ってみたい。

### 1. 講義と博物館見学

特に前期はほとんどが講義であったが、やはり面白かったのが資料としての実物を取り扱う実技型の授業であった。掛軸や茶碗などを巻いたり梱包したりすることは非常に難しくもあり、また最も「実習」を行っているという実感が持て、楽しいものである。贅沢を言えば、もう少し1人1人が資料に触れる機会が多いと良かったのだが、あの大人数を先生1人で見ると、という状況を考えるとやはり無理があるのだろう。実際、個々に注意を払っていてもその注意する点がズレていたり、触る方も緊張しすぎて手が震え「安定した状態で持つ」などの当たり前のことが出来ていなかったりと、指導にあたっていた先生方から見るとかなり危なっかしい場面の連続であったのではないかな、と今になって思う。

博物館見学にも授業と個人的なもので幾度か行ったが、この博物館実習での博物館見学で最も楽しみかつ特典であったのが、普段の来館では見られない収蔵庫や搬入庫などを見学できること、もう一つが博物館学芸員の方から直接話を聞けることであった。いわば舞台裏である収蔵庫などは、授業などで聞いて知ってはいても実際見てみることで随所に施されている処置・装置などの工夫に驚かされた。また実際に運営・展示を手がけておられる学芸員がどのような意図を持って、どこに注力して展示を行っているかなどを改めて理解することができ、また全く自分が気付かなかった部分が重要であったりしたことに気付いたりした。こうした見学の機会を得ることで、今まで目を向けていなかった部分にも注意するなど、自分の博物館見学のスタイルがやや変わってきたように思う。

9月には東京で2泊3日の博物館見学が行われた。この見学は、「経済的負担がかかる」博物館実習の中でその最たるものであった。実習の履修当初からそれは散々聞かされてきたことではあったが、やはり高くついた。さらに日程面でも2泊3日とは言うものの、朝集合・夕方解散であったため往復の夜行バスを含め事実上4泊5日である。こう書くといかにも東京での見学に不満ばかりあったように聞こえるが、もちろんそうではない。むしろ経済的な負担以外の面では非常に有意義であったと思う。今年は初日の東京国立博物館と最終日の国立科学館のみを全員参加として中日と最終日の午前を各班の自由に見学させたことが特徴であつたらしい。この方法は非常に良かったと思う。自分たちで見学する博物館を探し経路を設定するなどのことは、東京の

交通手段を知るいい機会になったのはもちろんのことであるが、何より自分たちの興味のある展示を知っている博物館に行くことでそれだけ熱心に見学することができた。興味のあるものだけ見に行くのでは少し問題もあるが、それも見学する最初と最後の博物館を指定していることで補完されているのだろう。ただ、班ごとに行動していく中で気が付いたことが幾つかあった。一館一館の見学にある程度の時間を想定して回るわけであるが、中には行って初めて展示室が小さい事に気付き、僅か30分で見終えてしまった館があったことである。これは事前の下調べが不足していたこともあるのだが、やはり所要時間は行くまで判らないことが多い。インターネットのホームページなどでは目安として見学所要時間を記してくれている館もあるが、その数はまだまだ少ないように感じる。しばしば旅行先などで博物館を見学する自分にとっては、交通機関の時間の都合もあって、こうした情報は非常に助かるものである。私事のようなのだが、例え目安であっても所要時間を明記することで意外と短時間で見学できることを知り、来館する人もいないのではないだろうかと思う。

## 2. 博物館実習展

なんと言ってもこの博物館実習展が年間を通しての活動の中心となるだろう。夏休み前までは何となく頭の片隅に実習展という文字は浮かんでいたが、9月に入るとグループも編成され、簡単な企画案も出されると、話はどんどん現実化していった。我々の班は9月に行った会合ですぐに宮武外骨の『滑稽新聞』についての展示を行うことが決まったのだが、その後の具体的な展示の話になるとすぐ壁に突き当たってしまった。

結局は10月に入ってから簡単な展示パート（各2人）に決定に入り、年表・広告・筆禍・注目記事などのパートを編成した。それ以降は図録・ポスター担当の立てた日程に従う形で進めたが、展示内容に関してはほぼ各パート・担当の自由な裁量によって行われ、それぞれ展示を決定した後、図録の原稿・解説を図録・ポスター担当に提出していった。また、我々の場合は雑誌・パネルの展示になるため、所謂「モノ」の展示に乏しいという先生方の指摘を受けたことで代表者を東京方面へ出して、外骨氏の甥の方から写真を借りるなどの方法をとった。『滑稽新聞』そのものは関西大学図書館から実物と複製版を拝借して展示にあてたのだが、その部数に限りがあることで各パートの展示内容（展示に使用する号）に重複が起る可能性があった。展示直前になってこの点を軽視したことで使用する号の重複が起り、やや混乱したが、コピーしてパネルにするなどの手段を用いることで難を逃れることができた。ただ、図録原稿などについては最後まで図録の編集担当者を奔走させてしまった。

上記のような失敗した点について考えてみると、やはりグループ全体での具体的な展示像についての意識の「共有」が充分なされていなかったことが大きな課題であった。これは、何度かの全体の会合に全員が参加できなかった現実もあるのだが、隣のパートが何をしているか、また全体での作業の進み具合がどんな具合かというものを理解しきれていなかった点によるところが大きい。特に図録の編集担当へは締切間際、もしくは締切後に手書・フロッピーディスク等様々な形で原稿が送られるなど、かなりの苦勞をかけたようだ。半ば世の常として編集担当者は苦勞するものなのであるが、皆に編集担当者に負担をかけまいという気遣いが不足していたように感じた。最後まで展示の細かい手直し、図録のコピー・製本などを行うなど、努力は惜しまなかった

つもりではあるが、やはり反省点は数多い。

しかし、実習展の開催初日に展示が出来上がった時は正直言って嬉しかった。この充実感は博物館実習以外の授業では味わうことは出来ないと思うし、グループで自由にテーマを決めて全員で協力する作業を行うことは非常に貴重な経験となった。

最後に実習の授業の形について触れたい。今年度の博物館実習は移行期ということもあり、例年とはまた違った形で授業が進められた。東京の見学実習のコース設定や実習展のグループ編成などかなり学生主体でその裁量に任せた所が多かった。そのことで実習展などでは難航する所も多く、しかし難航したことによって得られた所もまた多かった。ただし個人的には、特に実習展の作業の進め具合などについて、例年はどのようにしていたのかをモデルとして展示してもらえれば非常に参考になるのではないかと思う。もう一つがグループ・班の編成である。特に博物館実習ではその編成が重要である。そうした事を意識してか友人と一緒に受講する者も多いが、やはり当初は1人で受講するものも少なくない。この状態での班編成は最終的には上手くいくのかもしれないが、最初はかなり不安が伴うように思われる。そういう点を考えると、実習で資料に触れる際にその場で2、3人を組ませて受講者同士が対話しやすい方向に持っていくなど、ある程度グループの下地が形成されるような雰囲気があればもっとスムーズに編成が行えるのではないだろうか。

こうして1年間の博物館実習を振り返ってみると、本当にあっという間に過ぎてしまった気がする。4月には全く自分にとって心配なことばかり頭に浮かぶ授業であったが、実習を行う中でそれらの心配事も新たな関心や楽しさに置き換えられていったように感じている。幸い前期は就職活動と重なることも無くむしろ貴重な気分転換の場ともなり、後期も実習展でグループの人と仲良くなれたことなど、非常に自分自身が楽しむことのできた授業であった。今後も仕事など様々な面でこの授業で得た経験・知識を生かしていきたいし、博物館にもどんどん足を運んでいる色々な物に興味をもって視野を広げていきたいと思う。

## 博物館実習一ヶ年の総括

哲97-11 奥村まき

最後の授業で高橋先生は「この授業は物学である」と言われました。大学の授業に限らず、今まで受けてきた授業、今までしてきた勉強は、ほとんど文字から知識を得るものでした。他の人の書いた文字を通して得た知識であり、実際に自分を通して得たものではありませんでした。しかし、博物館実習では授業を受けて見学に行き、目の前で作品や資料を見たり、触れたりして目の前にあるものから直接知識を得ました。その知識はまだ文字で残されている知識に比べて幼いものですが、自分の目を通して自分なりに感じ、考えたものとして多くが私の中に残っています。

見学に行ったなかで、一番印象に残っているのは大阪府弥生文化博物館です。ここでは、学芸員の方の博物館の展示方法についての説明を受けながら、実際に博物館内を回りました。展示す

るものをいかに分かりやすく、興味を持って見てもらえるように配置するにはどうやってしたらよいか。特に示さなくても順路を自然に進んでもらうためには、どのようにしているのか。途中で飽きられないビデオの長さは、実験を重ねると2～7分であること。音声ガイドの利便性と値段や衛生上の問題。展示室への搬入口の大きさ等々。学芸員の方のこまやかな展示方法の工夫には驚きました。

弥生時代の人の格好をした灰色の、頭もただ丸いだけのマネキンがいました。昔の人はどういう風に服を着ていたのか知ってほしいが、普通のマネキンだと服があまりに目立たない。だからバックの灰色と同じ色で、人間の形を主張しないマネキンにしたそうです。見てもらいたいと思ったものを、自分の意図した通りに見てもらうにはどうしたらいいのか。その展示方法が難しく、展示方法そのものの意味が変わってくるので、一番頭を悩ませるところなんだそうです。

また、博物館の建築の段階での注意点も受けました。将来、今の自分たちの展示では使っていないが大きなものを扱うかもしれないので、大きな搬入口を作っておくこと。部屋の仕切りは可動式にし、配線も照明も変えられるようにしておき、多くの展示手法を使えるように配慮しておくこと。建築の図面を見ただけでは素人なので分からないから、実際に現場に足を運んでチェックすること。建物はただの入れ物ではなく展示を良く見せる器で、展示にも大きく影響を与えるというのに、このとき説明を受けて気が付きました。学芸員のかたからいろいろと博物館で現場のことを聞くことは、現実味があつてとても有意義でした。その場で説明を受けたので、どうしてそのようになっているのかもすぐによくわかりました。

また、これからの博物館は作品、資料を展示するだけではなくて、保存の役割が今まで以上に重要性を増してくるともおっしゃいました。博物館は展示するだけでなく、そのままにしておくことと忘れられて、なくなってしまうものを保管・保存する社会の記憶装置でもあるからです。夏に見学にいった元興寺文化財研究所は、文化財の保存方法を研究し、また実践しているところです。そこで木製品の復元を見学しているときに、処理はやり過ぎないことが肝心で、現状維持が大切であると教わりました。復元の一手手前で止め、遠くで見たら分からないように、でも近くで見たら分かるようにしておくのだそうです。研究する人が修復したところを、もともとそうであったと間違えないようにしてあげなくてはいけないのだそうです。それから十何年後かに再処理がしやすいように処理方法を残しておき、金属の場合はついていた錆も残しておくこと。ついていた錆も大事な資料の一部なんだそうです。

ここでは、将来を見据えた保存が行われていました。私は修復は完全にすることだと思っていました。完全に修復すれば、元の状態、作られた当時のものになると考えていました。でも実際はそうではありません。もし完全な状態になったとしても、また年数を経ると修復が必要になってきます。その時に再び修復がしやすいように資料を残すことが、修復をする人にとっての次世代への責任となっているのです。

授業で一番時間をかけたのは実習展です。企画・展示・図録まで先生のお力をかりて、自分たちでやりました。私が一番関わったのは展示です。授業を通して多くの博物館へ行き、様々な展示方法を見てきました。それらを参考にしながら展示方法をみんなで相談して、考えていきました。私たちははクラウド・キンター展をしたのですが、彼の多くの作品を皆さんに見てもらいたく、どんな風に展示したらいいかとともに考えました。年代別にしたほうがわかりやすいが、作品

の傾向がうまく伝わらない。作品を版画、写真、コラージュと分けたいが、しっかりとわけてしまうと今度はスペースが足りなかったり、逆に余ってしまったりする。作品を様式別に展示することに決定した後でも、作品を入れる額や台紙の色を選んだり、展示のバランスを見るときにまた悩んで何回も変更を重ねました。見てもらいたいものを目立たせようとすると全体のバランスが崩れて見苦しくなり、その間で悩んだものでした。

残念だったのが、最初の計画の段階ではキンターさんが関西大学で教鞭を取られたときのビデオを、展示中に流そうと思っていたのですができなかったことです。ビデオは視聴覚教室に保存されているつもりだったのですが、もう処分されていました。資料であるビデオと残っている作品を思うと、複雑な気分になります。こうやって資料は減っていくんだ、と実感しました。もし、私たちがビデオが処分される前にキンターさんの展覧会をしていたら、おそらくはビデオはもっと長く保存されていたでしょう。そして、多くの人の目に触れ、貴重な資料として扱われたことでしょう。一度失った資料の重さをこの一件で知りました。

実習展の講評を受けて、私たちの気の付かなかった点を多く指摘され、少し気を落としてしまいました。写真を扱うのなら照明をもう少し落すこと、紙を扱うときは湿度を保つこと、スライドの写真が歪んでしまっていたこと、作品を借りるときの調書が完全ではなかったこと等々。照明と湿度のことは考えてもいませんでした。博物館では温度と湿度を一定に保つことが大切だとあんなに言われて、私も当然だと思っていたのにもかかわらずです。どうして気づけなかったのだろうと落ち込みました。落ち込みましたが、いま指摘してもらえて良かったとも思いました。作品を見てもらうことに意識がいていた私たちは、作品を大切にすること、保存することを忘れていました。作品を見て何か考えてもらうこと、作品を保存することの両方が成り立って、展覧会が成功したといえると思います。展覧会の撤収をしているとき、自然にこのメンバーでもう一回やりたいね、という言葉が出てきました。私もそう思い、とても嬉しく思いました。

この授業では学芸員としての知識だけでなく、その前に物を借りるという上でのマナーや常識も習いました。茶室での授業がそうでした。昔の人には自然に身に付いていたはずの身のこなしも、私達は習わなくてはなりません。玄関での靴の脱ぎ方、障子の開け閉めや座る位置、美術品の扱い方から箱の開け閉めまでです。人にもものを貸すときに大切になるのは信頼関係です。信頼関係を築く上で前提になるのは、相手が常識を持った人であるかどうかです。常識となっていることを習うことは何か変な気もしましたが、知らないとどうしようもないことばかりです。特に木箱の開け閉めはそうでした。私の家にいくつか焼きものを入れた箱がありますが、あまり意識して紐を結んでいなかったと思います。障子の開け閉めは自分は知っていると思っていましたが違っていました。恥ずかしいことです。学芸員として社会人として、常識は身に付けていなければなりません。

この授業を受けて、いろんな博物館へ行きました。いままで展示物を見ていましたが、自習展で自分たちが展覧会を開いたことで、博物館で見る観点が変わってきました。作品の見べきところや注目する点が分かってきただけでなく、展示方法にも気を配るようになりました。展示方法をみることで展示の企画者の意図が分かり、背景にある事物や展覧会全体で伝えたいことも理解できるようになってきたと思います。一つのものを見てより多くのことが分かり出しました。ものそのものから多くのことを学ぶにはどうしたらいいのか。このことをこの授業で学びました。

## 博物館実習の一年間を振り返って

史・地97-114 福 島 徹

この一年間博物館実習の授業を受けて、他の授業と違って自分自身が積極的に参加することで、ただノートを取ってテスト前だけ勉強する、というテストが終わればすべて忘れることだけが授業ではないと実感しました。

この実習において、授業がすべて自分にとって興味がわくことばかりではありませんでした。授業中講義を聞かず、寝ていることもあり、メモなどノートに書き込んだ量は日によって差ができてしまいました。自分にとっては、やはり聞く講義ばかりではなく、聞く講義が半分、作業するのが半分、という形の方が実習としての良さがでると思えました。寝ていたことに関しては、どの講義も博物館に携わる学芸員の生の声なので、決して無駄ではないと自覚し、自分の反省すべき点として深く受けとめておきたいです。また他の授業同様ただ聞くだけで、受け身的に授業を受けていたので、専門的な内容が多いなかで自分から疑問点を探そうとせず、積極的に質問し、参加できなかったことについても自分のことをもう一度見直しすべきことだと思います。

この実習における授業ごとの日誌は、一応授業中にメモを取る程度のもので、それを実習簿に書かずにそのままにして、まとめて書き写す時には細かいところまで覚えておらず日誌としては不十分な出来上がりとなってしまった。また、授業により書いた量が多い少ないという違いがあるので、やはり自分から疑問点を見つけて書き込んでいくべきであったと思えました。

何度か博物館へ博物館見学に行き、自分自身で興味を持ってメモを取ったつもりでいたが、授業の日誌同様メモを取ったままで、見直すことをしなかったことで記憶に残ることを明確にはできなかった。また、博物館の学芸員の話聞くだけの受け身的になっていた。また、展示に関する事ばかり見ていたので、展示してある展示物にあまり目がいていなかったように思える。

また、博物館の見学の一つとしての東京実習では、自分達で自由行動の計画を考えるために班をつくって各班ごとに活動できたことは、ほかの博物館見学のような集団行動ではあまり味わえない自分達の興味があるものが見ることができ、また、集合も大阪ではなく現地である東京であったので、個人それぞれが東京までの行き方を考えていくという、自主的に行動できたことはこの実習の良いところであった。また、宿泊場所についても各個人にまかせてもらえたことは自分達で話し合っただけという、何でも決められたルールの上を走るのではなかったため、自分達で考える楽しみがあった。僕の班では、半分はせっかく東京にきたから遊べるようにお金を安くして、集合場所に近い上野周辺で宿泊場所を探して、素泊まり3500円という安い旅館を見つけたのですが、そこは東京大学の裏にある下宿のための旅館であったようで、また予約をしたのですが、はいていなかったらしく物置の部屋と急いで片付けて用意してもらいました。また、その旅館の廊下にはゴキブリが走っているなど、遊んで疲れた体にはかなりつらいものがありました。次の日に急いでほかの宿泊場所を探すためにいろいろなところに電話して、なんとか後二日間泊まる場所が見つかることができ東京実習を無事終えることができたという、あまり人に経験できないこともあり、楽しい東京実習でありました。しかし、このことで班のみんなにとっても迷惑をかけてしまい、申し訳なく反省しています。



自由行動である班行動においては、各個人がそれぞれ行きたいところをとりいれたために、一日でまわるにはともしんどいスケジュールとなってしまいましたが、一般的な博物館ではなく、かわった施設ばかりを選んだのでしんどいなかでも、楽しい班行動になりました。しかし、駅から遠くまた全然知らない場所でもあったので、道に迷って歩きまわるはめになりとても疲れ、もっとゆとりをもった予定をたてるべきであったと思いました。また、集合時間にも遅れることはなかったのですが、ぎりぎりであったので、時間には余裕持って集合場所に行くべきであったと思いました。

また、一日目の東京国立博物館は展示物が多く一日ですべて見るのはともしんどく、あと1、2日あればもっとゆっくり見ることができた。国立博物館ではすべて見たつもりが場所がわからず、見られなかったものもあり残念でした。

この博物館実習のメインでもある実習展に関しては、夏休みに入ってすぐにメンバーを集めたり、企画について話し合うなど早めに行動したつもりでしたが、時間にも余裕があったせいもあり、話が全然前に進まず、何度もみんなで集まり話し合いをしました。人数に関しては最終的には東京実習の班が三つ集まるというかたちで二十人になり、男が四人というバランスがとれていないが十分な人数ではありました。しかし、人数が増えれば増えるほど話し合いは前に進まず、夏休みから活動していたにもかかわらず、企画がしっかり決まったのは、企画書提出間近という遅いスタートでした。ここからも決して話し合いがすぐに進展することもなく、もめることばかりで話が全然進まず時間だけが過ぎていくだけでした。いつの間にか代表者にさされて、まとめなければならない立場にしながら、議論に積極的に首を突っ込んだため、もめる原因をつくってしまうことが多々ありました。自分がまとめ役として相応しくないのはわかっていたから替わってほしかったが、誰もしんどいことを受け入れてくれなかったので最後まで代表者をやり、これで良かったのかという疑問は残る。実習展の日が近付いてくると企画に関してほしいの目処がたち、役割分担していき、作業を効率良くすすめていくことでなんとか実習展までには間に合わせるまでになった。しかし、自分の予想通り、当日まで手直しをするというぎりぎりの完成で、自分にとってはすべての力は出したが展示としてはテーマを大きく出す、栄養面に関してもっとわかりやすいように工夫するなど改善すべき点は数多くあった。あと、ほかの班についてもどのような工夫をしているかなどを観察して、自分達の展示に生かすべきであった。また、東京実習同様班のみんなに迷惑をかけてしまったので申し訳なく思っています。

この一年間にこの実習において、椅子に座ってより作業したり、見学したりと自分で考えることが多くあったので、反省すべきことはいくつも出てくる。しかし、自分自身にとってはとても身に付いたことも多くあった。東京実習においては、自分達で計画をたてて遊んだり、班行動したりして、自分のことは自分でするという責任を自分に持てて、また、電車の乗り継ぎは博物館の場所を調べて移動時間をだすなどして、しっかりした計画を立てることができた。東京までの新幹線の切符を米田先生に引率してもらうというかたちで、団体割引でとるという自分から何かをするという積極的行動が身に付きました。また、実習展においても自分が班の中心になって話し合いを進めたり、作業していく中で、決してスムーズにことが運んだわけではないが、自分の長所・短所が見えて、大きく成長できたと思います。そのことがこの先の就職活動などにとっていい影響があると思うので、この博物館実習が学芸員の資格を取るという意味だけでなく、参加

できる授業の楽しさを教えるものであり、大学の授業が参加型のものになれば、もっと良い方に進んでいくのではないかと考えます。

最後に、授業の中では講義に重点がおかれているので、もっと作業などの実際目で確かめたり、手を使うなどをとり入れることで、より講義の内容が頭に入るし、自分で考えて授業を受けることができる。それが実習展に生かされて毎年レベルの高い展示会になると思います。また、実習展に関しては夏休み明けの班決定ではなく、夏休み前に決めてしまうほうが夏休みに班で集まりやすく、もっと早くから作業ができると思います。あと、実習展に関する計画書をもっと詳しく作ったり、実習展写真を班ごとにとるなど、次の年の参考にしたら考える上でもより具体的にイメージがわくであろうし、企画が立てやすくなる。

## 博物館実習 1ヶ年の総括

史・地97-36 奥田義隆

この博物館実習の授業は、私にとって非常にきついものであった。体育会野球部に所属しており、週末はリーグ戦のため金曜日の午後は全員練習となる。そのため授業は休まねばならないが、無理を言って授業に出席させてもらった。野球の方を断念するみたいにはなったが、その分いい経験が出来たように思う。

### 東京実習

野球部以外の人と寝食をいっしょにするのは初めてで結構不安だった。とりあえず上野で待ち合わせて、次の日の東京国立博物館に備えた。

1日目の9月9日、東京国立博物館の外観はさすがというか、風格が備わっていた。ここだけで、日本及び東洋の美術・考古に関して大体をつかむことが出来る。本館は帝冠様式の代表作として有名で、昭和初期を彷彿させるものだった。収蔵件数は約4万2千と豊富にあるが、あの時間で全部ゆっくり見るには無理があったように思う。日本美術が中心で、新しい分野を開拓するには絶好の博物館だろう。表慶館は残念ながら閉館中であつた。個人的にはここを見たかったので、機会があれば行ってみたい。東洋館は日本以外の東洋諸地域の美術・工芸・考古遺物を陳列するために開館され、本館と対をなしているようだ。1階から3階まで半階ずつ階段を上って順に各陳列室をめぐる構造で、とても興味を引く造りだった。平成館も早く完成してほしい。日本の考古遺物とアイヌ民族資料ということで、行ってみたい。法隆寺宝物館は完成に間に合つてよかった。新しいということで、とても工夫を凝らしていたと思う。

特に、第2室の金銅仏・光背・押出仏の部屋は、真つ暗な中で作品にのみ照明をあてていて、とても幻想的な感じだった。今回で1番印象に残った展示法だった。とてもすばらしかった。

全部じっくり見るには2日は必要だろう。けど、それぞれに特徴を持たせて豊富な遺物・作品を展示していたと思う。

2日目の9月10日はグループ行動ということで、私達の班はそれぞれの研究テーマと興味を考

慮して、刀剣博物館・武蔵野音楽大学楽器博物館・オルゴールの小さな博物館に決定した。

刀剣博物館は渋谷区代々木にあり、民家に囲まれて立っている。第2次世界大戦後に駐留軍の没収によって壊滅しようとしていた日本刀を混乱から救うために昭和23年に文部大臣の認可を受け日本美術刀剣保存協会が設立され、全会員の協力合資を基礎として43年に協会に付属する刀剣博物館が設置された。刀剣・刀装具・甲冑・金工資料など約120点で、平常陳列「古刀・新刀名作展」のほか、特別展も行われる。日本刀を研究する人のために、室町の筆写本をはじめ江戸の諸家秘伝書他1200点の刀剣関係古伝書を蔵する資料室を週2回、閲覧・複写を許可するなど日本刀に関する調査研究の発展に寄与している。

次の武蔵野音楽大学楽器博物館は、少し離れた練馬区にあり、大学に入ると、音大らしくピアノなどの楽器演奏が聞こえてきて心地よかった。昭和53年には入間校地に、平成5年には多摩校地に楽器展示室が開設されている。所蔵品は、邦楽器、外国楽器、楽器付属品、音楽関係の装置・器具類の4つの部門に大別できて、ヨーロッパの多くの名器、アジア・アフリカなど世界の民族楽器など5千点にもおよぶ。週1回しか一般公開していないため、当日は閉まっていたものの、快く博物館を見学させていただいた。事前の準備不足ではあったが、本当に感謝している。

最後は文京区目白台のオルゴールの小さな博物館である。ここは目立たないので見つけるのに一苦労した。3つの部屋を順に回り、それぞれの部屋ではひとつひとつ解説を加えながらその音色を聞かせてもらった。ここも時間外ながら見学させてもらった。

最終日の9月11日は、なるべく近いところということで台東区立下町風俗資料館に行った。1階展示室は明治・大正の下町の情景をあらゆる商家店先と長屋を再現していた。書置きを見てみると、年配の方が非常に懐かしがっているコメントがおおかった。2階は江戸からの生活資料の展示で、銭湯や遊び道具など楽しめるものだった。

昼からは最後の国立科学博物館の見学だった。今まで行ったものとは全く違って、実際に触れたり体験することができ新鮮であった。本館は地球と生物の進化を説明し、みどり館では音響と映像を利用して自然史を展示したり、読書コーナーを設けるなど自然科学についてより知識を深めさせようとしている。新館は実際に探検したり体験したりでき、また他とは違った接し方ができる。

それぞれの博物館では色々と思考をこらして、とても勉強になった。今回の実習のおかげで博物館を違った目でみるができるようになったし、プライベートでも博物館に行くことが多くなった。

## 実習展

東京実習の班で、8月の終わりからテーマ決めなど、行動に移し始めた。2・3回集まって、花火・ちょうちん・だるま・火・携帯電話・切手など具体的に案が挙がり始めてとりあえず分担して調べることになった。東京実習があったので中断したが、ここまでは順調にきていた。しかし、東京国立博物館の後の班決めでいくつかの班と合流することになり、こちらの方針を理解してもらって一緒になったはずだった。いきなり、あらかじめこちらがやっていたことを反対され、1からのやり直しとなってテーマ決めにかなりの時間を費やした。大学生になっても協調性や協力するなど中学高校生でもやれることがみられなくて、とても残念だった。自分自身がどれくら

い協力できたかは自信を持っては言えないが、都合であれができないこれはできないといったようなことはなく、少なくともいい方に貢献できたと思う。

「カップラーメン」にテーマは決まり、3つの班に分かれて始まった。ただラーメンを扱うだけでなく、①地域限定商品、②キャラクターの2つに絞って進めた。私の分担は、各ラーメンの栄養素を調べそれを表にして、それぞれ卵をつけた場合、牛乳をつけた場合の栄養素の変化を表わした。エクセルを初めてさわり、解からないなりにいい経験ができた。完成は結局前々日で、仕上げは当日だった。不満足ながらも完成したときはみんな喜んで。共通していたのが、ホッとしたことだった。食い違いがたくさんあってみんなピリピリしていたので、肩の荷がおりた感じだ。博物館学をひととおり学習してきた人達の意見や発想が十分に詰められた展示であったといえるかはわからないが、今後様々な職に就いていくなかで、何らかの役には立っていこう。

### これからの博物館

授業を受けていて、1つ気になる言葉があった。「エコミュージアム」。これは英語であり、eco と museum の合成語である。本来はフランスで誕生した博物館の1種なのでエコミュゼとなる。エコミュージアムの開祖はジョルジョ・アンリ・リヴィエールで、従来型の博物館の改革を思い立ち、新しい博物館の理念として、「エコミュージアムは行政と住民が一体となって発想し、形成し、運営していく砦である」と主張した。エコミュージアムは資料は現地保全を原則としているのに対し、日本の博物館法では依然として収集からスタートするとなっている。エコミュージアムの目的は地球社会の発展に貢献するとか環境保全を重視するとなっているが、日本の定義にはそのような表現は見当たらない。

エコミュージアムと比較されるのが伝統的博物館で、日本のほとんどはそれにあたる。伝統的博物館は決められた敷地内に建物を建て（あるいは建っている）、その中に収集したものを研究し陳列している。エコミュージアムは収集するのが「もの」ではなく「記憶」である。だから展示も現地野外展示が中心となって展示室はサテライト（遺物）そのもので、現地保存が困難なものはコア（中核博物館）に移される。つまり、その地域が博物館なのである。基準となるものを決めてテリトリーの範囲が決定する。自然公園がテリトリーに決定すれば国立公園型・地域自然公園型エコミュージアムとなり、農山村であれば農山村型、市街地であれば都市型、鉱山遺跡であれば産業遺産型など様々な組み合わせができ、とんでもない可能性を秘めているように思う。

日本で初めてエコミュージアムを紹介したのは新井重三氏である。エコミュージアム研究会の発足や関連学会等での取り上げなどによって、日本でもエコミュージアム活動が盛んになった。近江風土記の丘など歴史公園野外博物館、愛媛内子町など町並み保存、都留市のフィールドミュージアム構想などである。その他にも近年多くの自治体で活動が活発になっていて、様変わりを見せている。

エコミュージアムは行政と住民による二重入力方式で展開するけれども、官主導と民主導が相半ばしている。官主導は展開が早いけれども息切れする可能性を秘めていて、それに比べて民主導は展開がゆっくりだが着実に進むという特性が見られる。山形県朝日町のような両者のパートナーシップ型になるまでには両者の思考錯誤が必要としている。

しかし、日本の博物館にはあらゆる所から物が集まってきて、その場所に行かなくても博物館

に行くだけで見て学ぶことができる。しかし、地域に密着し親しみやすい博物館であるかといえ  
ば問題がある。見学していても思うことだが、重い雰囲気漂っている。それを克服するた  
めには少しでもエコミュージアムの理念に近づく努力が必要だろう。誰もが気楽に入れるよう  
にするには、やはりその地域一帯を博物館にするエコミュージアムの理念は間違っていないと思う。

世界がこの方向に向かっている中、日本はどうしても受身になってしまう。伝統も必要だが、  
それを打破する新しい旋風も必要である。